

論文

南方熊楠研究序説

— 南方熊楠の日記と書簡を中心にして —

雲 藤 等*

はじめに

民俗学者あるいは博物学者として知られる南方熊楠は、慶応3年(1867)から昭和16年(1941)にわたる74年の生涯で夥しいほどの自筆史料を遺している。日記・書簡・論文下書き・腹稿(論文を書くときの構想を練ったもの)・抜き書き類(「ロンドン抜書」・「田辺抜書」・「課餘随筆」など)などである。熊楠死後、その膨大な史料群は長女・南方文枝の手により、そのまま自宅の蔵に丁寧に保存され、散逸を免れていた。平成17年(2005)に刊行された『南方熊楠邸資料目録』には現存する熊楠史料の詳細が記されている。

また、植物学者でもあった熊楠は多くの植物標本と図譜の原稿を残しており、それらは現在国立科学博物館に収蔵されている。

その他の文献史料類は平成18年(2006)に、南方邸の隣接地に開館した南方熊楠顕彰館に収蔵・保存されている。

これらの史料は言うまでもなく南方熊楠を研究する場合の基礎となるものである。しかし、従来の熊楠の研究においては、これらの史料それ自体について本格的に考察した論考は皆無で

ある。したがって本稿では南方熊楠の総合的研究を行なう上では欠かせないこれらの史料群の内、特に日記と書簡を中心にして、その二つの史料群の相互的関連について検討し、熊楠史料の持つ特徴・意義について考察する。

なお、文中での「書簡」とは南方熊楠が各氏に宛てた手紙・葉書、「来簡」とは各氏から南方熊楠に宛てた手紙・葉書を指す。

1. 日記

(1) 日記の特徴

南方熊楠の日記は10代から最晩年の昭和16年(1941)12月(数え年75歳)までのものが現存する。明治18年(1885)の東大予備門在学時から大正2年(1913)までのものは、『南方熊楠日記』(以下『日記』)として八坂書房から刊行されている。この内、明治29年(1896)分は欠本となっていたため抄録を載せるに留まっていたが、その後日記原本が発見され中瀬喜陽[1993a]の手によって翻刻されている。したがって現在では明治18年から昭和16年までの全ての日記が残っている。

なお、明治14年(1881)の和歌山中学在学時の日記は、現存するものでは最初の日記で、中

* 早稲田大学大学院社会科学研究所 博士後期課程2年(指導教員 島 善高)

瀬 [1992] に収録されている。これは日付だけで内容記載がない日も多く、極めて簡単に記されているが、中には興味深い記事もある。例えば4月29日条には、「四時比家巖山崎氏へ行き顫を打ち脳を震す、これが為め前肢神経血系麻痺して動かず、明日に至て止す」⁽¹⁾とあり、テンカン発作を疑わせるような記述が見られる。

南方熊楠の病歴としてテンカンがあったことは有名であり、彼の「手紙魔」ともいうべき特徴はテンカン患者に特有のものであると指摘されている [近藤 1996]。この記事とテンカンとの直接的な関連は不明ではあるものの、南方熊楠の病歴を考える上では重要な史料といえよう。

大正2年以降の分については中瀬 [1995] が紹介し、また昭和以降の日記についても中瀬 [1997] によって抄出・紹介されている。しかし、大正3年以降の日記の大部分は未刊行のままである（大正8年分は『熊楠研究』7, 8号に掲載されている）。

ところで、斎木一馬は日記の一般的特徴として「その記載がおおむね赤裸々であり、誇張・隠蔽・曲筆・虚偽・宣伝等の欠点が、文書に比して遥かに少いと認められる」 [斎木, 1978: 25] と述べている。しかし、一方で佐々木隆 [1977] が指摘するように、「他人の目を意識しない日記は無い」ということもまた事実であろう。佐々木はある日記がどの程度まで他者の目を意識して書かれているのかを判定するのは容易ではないとしながらも、「家庭内の好ましからぬトラブルが平然と描かれていれば、その日記は比較的、他人の目を意識しないで書かれたものとみてよいであろう」 [佐々木 1977: 289] と述べる。それでは熊楠の日記に関してはどう

であろうか。

日記の記述スタイルは当然年代により異なる。植物採集を活発に行なっているときは、それが採集控帳のように、採集した植物の種名と数を克明に書き留めている。結婚して子どもが生まれて以後は、あたかも育児日記のように、子どもの成長やエピソードを詳細に記している時期もある。その中で妻の松枝とたびたび喧嘩をしている記述が散見され、終には妻が子どもを連れて家出をしたとの記事が出てくる。明治41年（1908）4月9日条に「朝起出しが又臥す。此内松枝荷物かた付居り、終にチヨコ六負ひ去る」⁽²⁾とある。チヨコ六とは長男熊弥のことである。その後には、妻と子どもを連れ戻すべく、妻の実家との交渉についての記述も見える。

大正14年（1925）熊弥の精神病発病以後は、熊弥の病状について、英語で書かれるようになる。これは、例えば家族や熊弥自身に盗み見されても、内容が分からないようにするための工夫と推測される。さらに他人に知られたくない内容には、ロシア語を使ったり、熊楠だけにしか分からない符牒を使ったりもしている。

またこの日記について熊楠は娘の南方文枝に次のように語っている。「記憶力というものは年数が経てばあいまいなものになる、そのとき日記を見れば正しいことがわかる」と言って、日記は大切にしておいて人には触れさせず、寝るときには必ず枕元に日記と十手を重ねて置いていたという [南方文枝 1981: 65]。また別の所で南方文枝は熊楠の日記について次のように述べている。「日記も非常に大事にしていました。懐に入れて持ち歩いたり、わらしべを上置いて触られていないか確かめたり、それはもう…」 [南方 1990: 172]。この証言から熊楠が日記を

大切に人に盗み見されないように用心していたことが窺われる。

以上の点から熊楠の日記は他者に見せることを前提としていないことが明らかである。したがって斎木の指摘する日記の一般的特徴とほぼ合致し、その記載内容には一応の信用がおけると見て良いであろう。

(2) 日記の利用法

日記の記載は、全体としては一日の生活上での出来事について時間順に簡単に記すのが通例である。詳細に何枚にも渡って大量に書かれている書簡や随筆類とは異なり、その記述は極めて簡潔である。当然備忘録の役割を果たしており、自分だけが分かれば良いので簡潔に書かれるのも止むを得ない。しかしそのために後世の他人である研究者が読むと良く理解できない点がかなりある。したがって日記読解の上でも、また書かれている内容をさらに知るためにも、その時期に出された書簡は重要である。熊楠の書簡は単純に相手に伝えたい用件を記すだけではなく、日常的な出来事やいろいろな感想を事細かく書き記すという特徴がある。そこから逆にいうと、熊楠について研究する場合、日記を索引代わりに使い、その詳しい内容は記載された日前後に出された熊楠の書簡を見ることによって情報が得られる、という利用法が可能となる。

一例を挙げてみよう。熊楠には幽霊のエピソードなど面白い逸話がつきまとっているが、次に紹介するものも、ちょっと変わった気象(自然現象)の記事である。

大正15年(1926)9月14日の日記には次のようにある。

七時半頃廁にあるに松枝よびに来る、二階に上るに予(予は誰か予の蔵書標品等を引きさがせしことなるへしと思ひ上り候)東北隅の天に火をバケツツよりあけ下す[カ]如くまた大火事如く光りはるか東南方に潮見山を隔てて高く反照す、文枝初て二階に上り気付し也といふ。久しく見るに少しもやまず八時頃に至りやや薄らぎしやうにて雲は漸々南へおし来る。⁽³⁾

少々不思議な天気(自然現象)について記している。火をバケツからこぼすように、また大火事のように空が光っているというのである。夕焼けでも雷でもないようである。妻の松枝と娘の文枝も確認していることから、熊楠の幻覚ではないと考えられる(ただし、松枝・文枝が確認したこと自体も熊楠の幻覚の一部であった可能性もあるかもしれない)。この自然現象については同日に平沼大三郎に宛てて手紙を書いているが、それにはもっと詳しく次のように記述している。

この間だ午後七時半小生廁に上り居りしに拙妻走り来り二階へ来り見よといふて又走りゆく、[中略]右の次第因て二階へ上りし。これは小生が二階におきある書籍標本をむちやくちやにふみつぶせしかなんかと存じたるに候。然るに上を見れば眺望よき二階より東北隅よほど遠隔の地の天殆んど地平に接して左の図[省略]の如き現象を見る。乃ち十秒位いつ隔てて東北隅に巨大なるバケツに火の汁を盛りたるを鎔鉄所にて注下するやうにて大なる火事を倒さまにしたるやうなものが迅速に下り又消ることしばらくもやまず。それに少し後れて口なる高き処に潮見^{しほみ}岬の峯を隔てて白色の光りが閃めくなり、(イ)は電光とは見え、橙赤色の火事の焰をバケツに入れて十秒おきに注下する如く大火事に棟が落るたびに焰が上るやうにてまことにすさまじきこと地獄の絵の如し。もはや半時間以上になるも少しもやまず。かくてあるべきに非れば小生は二階を下り誰にも口外せしめず。然るに知らぬが仏で此地は小生方ほど眺め広き二階少なければ誰も此事を知らず。漸

く只今俣が長屋より帰り窓が光ると申し居り候。
ただの電光と思ひ居るらしく候。⁽⁴⁾

([] は引用者、また文中イ、ロは省略した図に記されている記号である)

これを見ると、内容は日記とほぼ同じであるが、東北方面の空で火の汁のようなものがバケツからこぼれ落ちるように流れており、火事をさかさまにしたような状況であるなど書簡の方がかなり詳細な記述をしている。引用では図を省略したが、その光景をスケッチして丁寧に解説しており「まことにすさまじきこと地獄の絵の如し」という感想も述べている。

この自然現象はどのようなものなのかは具体的にはわからない。その後の平沼宛書簡にもこの日の目撃談が出てくるが、それには当時の地元新聞には一切この現象に関する記事がなく、不思議であると述べるのみである。この自然現象についての記述自体はここでは特別に重要ではない。しかし日記の記述が簡単で理解しがたい所があったとしても、その日に発信した手紙があれば、その手紙に詳しい内容が書かれていることの一つの事例となるものである。

またもう一つ日記の利用に当たって注目すべきなのは、発信欄と受信欄である。熊楠は毎日の手紙の発信・受信を丁寧に書き留めている。若干の脱漏はあるだろうが、これらをまとめて統計を出すことにより、熊楠がいつ頃、誰に宛てて(どの分野の研究者、またはどのような活動家に宛てたのか)書いた手紙が多いのかが分かる。それにより熊楠の研究活動がどの時期にどの分野で活発に成されていたのか、の状況が把握できる筈である。また、この発信・受信欄には、手紙の内容を簡単に記すこともある。したがって、現在では既に失われてしまった書簡

についてもその内容の一部を把握することが可能となる。

日記の記載には他人が見てもその内容が分からないように英文で書かれている箇所があり、さらにはロシア語の符牒のような記載もあることは既に述べた。しかし結局日記は熊楠の手によって焼却処分を受けておらず、また遺族に対しても破棄するようにとの遺言はなかった。

この点から考えると、彼は日記を他人に見られないように用心をしていたものの、最終的には後世に残そうとしていたものとも考えられる。熊楠関連の書簡や随筆・新聞記事などを読むと、彼にはその生涯を通じて一貫して失われていくものを後世に残そうとする「保存」という態度・思想を窺うことが出来る。彼の結果として日記を後世に伝えたという行為自身もまた失われていくものを保存しようとする行動の一環として熊楠は意図していたのかもしれない。

2. 書 簡

熊楠はその生涯にわたってほとんど毎日大量の書簡を各方面に宛てて書いていた。その特徴はとにかく一通が長いということにつきる。「手紙魔」というべき人である⁽⁵⁾。

この熊楠が書いた書簡の主なものは乾元社・平凡社の二つの『南方熊楠全集』(以下、平凡社版全集を『全集』と略記する)に収録されている。それ以外に書簡集として編集されたものに、民俗学者柳田国男に宛てた『柳田国男 南方熊楠 往復書簡』[飯倉 1985]、真言宗の僧侶である土宜法龍に宛てた『南方熊楠・土宜法龍往復書簡』[飯倉・長谷川 1990]、男色研究家の岩田準一に宛てた『南方熊楠男色談義』[長谷川・月川 1991]、熊楠の幼少からの友人で実

業家であった小笠原誉至夫へ宛てた『南方熊楠 竹馬の友へ 小笠原誉至夫宛書簡』[長谷川・小笠原 1993] などがある。

書簡は日記と違って当然相手があるために、宛名人に対する配慮などから、また熊楠の相手を楽しませようとするエンターティナーとしての性格によるためか、事実が微妙に誇張・歪曲されている可能性がある。それが例えば自己の研究所への寄付金依頼などの特別な目的がある場合には、往々にして見られることである。その一つに幽霊のエピソードがある。

大正14年(1925)1月31日付の矢吹義夫宛書簡には次のような有名なエピソードが書かれている。

ナギランというものなどはステファノスフェーラ(stephanospharaと申す、欧州にて稀にアルプスの絶頂の岩窪の水に生ずる微生物など、とても那智ごとき低き山になきもの)幽霊があらわれて知らせしままに、その所に行きてたちまち見出だし申し候。(植物学者にかかること多きは従前書物に見ゆ。)また、小生フロリダにありしとき見出だせし、ピトフォラ・ヴァウシェリオイデスという藻も、明治三十五年ちょっと和歌山へ帰りし際、白昼に幽霊が教えしままにその所にゆきて発見致し候。今日の人間は利慾我執事に惑うのあまり、脳力くもりてかかること一切なきが、全く閑寂の地におり、心に世の煩わづらいなきときは、いろいろの不思議な脳力がはたらき出すものに候。⁽⁶⁾

この書簡の内容を整理してみると

- ①蘭の一種ナギランは幽霊が知らせてくれた場所で発見できた。
- ②微生物のstephanosphara(ステファノスヘーラ)の発見も同様。
- ③フロリダにいたときに見たピトフォラ・ヴァウシェリオイデスという藻も同様に明治35年

に白昼幽霊が教えてくれるままに行った場所で発見できた。

どれも幽霊がその植物の生息場所を知らせてくれて発見に至ったというのである。この内、③は明治35年(1902)という年代も確定しているので、この時期の日記で当該内容が確認できる。これに関する記事は明治35年10月3日条にある。それには、「一昨日所獲吉田近傍紡績会社辺の池に泛る藻を見るに、pithophoraなり。其昔フロリダにて所獲に近似す」⁽⁷⁾とある。このpithophoraとは史料中にあるピトフォラ・ヴァウシェリオイデスのことである。フロリダでの体験の言及もあることから、これは③の内容を記したものと思われるが、この記述に幽霊は一切出てこない。この記事の一昨日に当る明治35年10月1日条には「柳町より太田村、黒田村、吉田を経、藻少々とる。(□天神にて牛糞に生ぜるスヒーリアーとる)」⁽⁸⁾とある。

この日記の記述からすると、10月1日に採集した藻の内に、以前フロリダで採集したことがあるpithophoraが偶然含まれていた、というものである。つまりそこには幽霊はおろか霊感的な言及も一切ないのである。これは日記だからそういう不思議なことを書かずに簡潔に記したと見ることも可能ではある。しかし日記の他の箇所の記述には地震を予知した「予地震ゆるならんといふに果して中夜地震ゆる。」⁽⁹⁾(明治35年9月4日条)という記述がある点、また、おそらく夢と混同しているのであろうが、「予、灯を消して後魂遊す。此前もありしが、壁を透らず、ふすま、障子等開き得る所を通る故に迂回なり。枕本のふすまのあなた辺まで引返し逡巡中、急に自分の頭と覚き所へひき入る。」⁽¹⁰⁾(明治37年4月25日条)という幽体離脱のよう

な不思議体験も記しているので、日記の特徴というわけではないであろう。

また①のナギランの記述も日記にはある。

「それより河側歩しヂアンの滝に遊ぶ。ナギラン五株（一に実青きもの二顆あり）（此滝に此蘭あるべしと昨年より何の拠なきに思居しに今日ふと見当たる。）」⁽¹¹⁾（明治36年9月9日条）

この記述にもやはり幽霊は出てこない。ただ何となくあるように思った所にあったということで、何かを採集する場合には多くの人々が経験するであろう程度のことである。②の場合も同様である（明治34年4月18日条、『日記』2巻, p. 428）。熊楠はこれを面白おかしく植物採集の際に「幽霊の導き」があったなどという、しなくても良いエピソードをわざわざ挿入しているのである。

またこの書簡では、熊楠の記憶に関する有名な話、すなわち他家で読ませて貰った『和漢三才図会』を少しずつ暗記して自宅へ帰って筆写したというエピソードも綴られている。この件に関しては明治14年（1881）7月24日の中学生時代の「日記」には「本日津村氏に三才図会かやす」⁽¹²⁾という記事があり、借りていた『和漢三才図会』を返却している事実が判明している。したがって暗記して筆写したのではなく、実は借りて筆写していたことが明白である⁽¹³⁾。

この矢吹義夫宛書簡は熊楠が自分の履歴を物語っているもので、個人に宛てた書簡ではあるが、一般的には「履歴書」として有名なものである。長谷川興蔵の解説〔長谷川 1993〕では、この矢吹義夫宛書簡は、「キューバ独立革命軍参加」や「孫文救出」といった「熊楠神話」もなく熊楠の自伝としてはしっかりしており、一級資料であると評価している。しかし、このよう

に日記の記事と比較すると、そのまま鵜呑みにできない箇所が浮かび上がって来るのである。

3. 日記と書簡の相補性

既に述べた通り熊楠の日記は一生涯にわたって遺されており、その記述はそのまま熊楠についての生涯の索引の役割を果たすことができる。ただしその欠点として、自分だけが分かれば良いので記述が簡潔に過ぎることが挙げられる。この日記の簡潔な記事を補うものとして書簡は重要な役割を持つ。しかし書簡には若干の誇張が含まれる可能性が常に存在する。したがって今度は書簡で誇張されたことは逆に日記でそれを訂正できるということになる。つまり日記と書簡は相互に補いあう形で読むことにより事実の確定や熊楠の実際の考えに近い事柄が抽出できるのである。この二つの資料をきちんと抑えておくことは、いろいろな伝説に彩られている南方熊楠の研究にとって非常に大切なことである。

この補い合う性質を持つ日記・書簡の残存状況を、ここで年代順に整理して概観してみよう。次頁の表1は日記と主な書簡の残存状況を整理したものである。この表からも分かる通り、おおまかに言うと、20代では日記は完全に残っているものの、書簡については複数の友人に宛てたものがあるのみで、量はそれほど多くはない。したがって20代前半の熊楠の状況を知るには日記と後述する弟の常楠からの来簡が重要史料となる。その他に当時の留学生仲間と作成した回覧板的な新聞である「珍事評論」という資料が残されている。これは熊楠20代前半の状況を知る上で、日記とともに貴重なものである。

表1 南方熊楠の日記と書簡の残存状況表

年代 (年)	西暦 (年)	年齢 (歳)	日記	在米書簡 (各友人宛)	土宜 法龍	古田 幸吉	柳田 国男	小畔 四郎	上松 薊 (しげる)	平沼 大三郎	毛利 清雅	宮武 省三	今井 三子	岡田 要之助	三田村 玄龍
明治14	1881	15	○												
15	1882	16													
16	1883	17	○												
17	1884	18	○												
18	1885	19	○												
19	1886	20	○	○											
20	1887	21	○	[○]											
21	1888	22	○												
22	1889	23	○												
23	1890	24	○	○											
24	1891	25	○	○											
25	1892	26	○												
26	1893	27	○		○										
27	1894	28	○		○										
28	1895	29	○												
29	1896	30	○												
30	1897	31	○												
31	1898	32	○												
32	1899	33	○												
33	1900	34	○												
34	1901	35	○		○										
35	1902	36	○		○										
36	1903	37	○		○										
37	1904	38	○		○										
38	1905	39	○												
39	1906	40	○		○										
40	1907	41	○												
41	1908	42	○												
42	1909	43	○			○									
43	1910	44	○			○									
44	1911	45	○			○	○				○				
45	1912	46	○			○	○				○				
大正2	1913	47	○			○	○				○				○
3	1914	48	○			○	○	○			○				
4	1915	49	○			○	○				○				
5	1916	50	○		○		○				○				
6	1917	51	○				○				○				
7	1918	52	○					○			○				
8	1919	53	○						○		○				
9	1920	54	○					○			○				
10	1921	55	○		○				○		○				
11	1922	56	○		○			○			○				○
12	1923	57	○					○			○	○			○
13	1924	58	○					○	○		○	○			
14	1925	59	○					○	○		○	○		○	
15	1926	60	○				○	○	○	○	○	○		○	○
昭和2	1927	61	○					○	○		○	○		○	○
3	1928	62	○					○	○		○	○		○	○
4	1929	63	○					○	○		○	○		○	○
5	1930	64	○					○	○		○	○	○	○	○
6	1931	65	○					○	○		○	○	○	○	○
7	1932	66	○					○	○		○	○	○	○	○
8	1933	67	○					○	○		○	○	○	○	○
9	1934	68	○					○	○		○	○	○	○	○
10	1935	69	○					○	○		○	○	○	○	○
11	1936	70	○					○	○		○	○	○	○	○
12	1937	71	○					○	○		○	○	○	○	○
13	1938	72	○					○	○		○	○	○	○	○
14	1939	73	○					○	○		○	○	○	○	○
15	1940	74	○					○	○		○	○	○	○	○
16	1941	75	○					○	○		○	○	○	○	○

凡例: ○はその年に出された書簡が残されていることを示す。[○] は年代推定を示す。年齢は数え年である。

明治16・17年の日記は「備忘録」である。

出典:『南方熊楠邸資料目録』、『南方熊楠全集』、『南方熊楠書簡 盟友毛利清雅へ』、『父南方熊楠を語る』、『門弟への手紙』

20代後半では後に高野山管長となる土宜法龍に宛てた書簡がある。これにより熊楠の科学および宗教思想に関する読書と思索の発展過程についてかなり詳細に窺うことができる。

30代では、後半は引続き土宜法龍宛書簡が遺されているが、前半は帰国後の那智に隠棲していた時代でもあり、一時的に外部との交流を遮断しているときであるため、日記は唯一の史料となる。また、この時期に熊楠は精神的な不安定さのためか、前に引用した幽体離脱のようないろいろな不思議体験を日記に綴っている。しかし、それらは実際の体験というよりも幻覚あるいは夢との混同である可能性が高い。

40代からは従兄弟で神社合祀反対運動に共に取り組んだ古田幸吉、同様に神社合祀反対運動に助力した民俗学者の柳田国男への書簡がある。この両者の書簡は熊楠の神社合祀反対運動を理解するための必須史料といえる。また柳田との書簡が民俗学関係の重要史料であることは周知のことである（柳田は熊楠からの書簡を民俗学の貴重な情報源と考えて、清書・製本して「南方来書」全10冊として保存していた）。

40代後半からは地元のジャーナリスト・政治家である毛利清雅宛や小畔四郎、上松蔭といった植物学関係の高弟に宛てた書簡が大量に残存しており、それらが熊楠の亡くなるまで続くことになる。

表1にあるように40代以降は日記とそれを補うであろう書簡が数多く残されていることが明らかである。したがって40代以降の熊楠の活動はこれらの史料により、かなり詳細に分かることになる。一人の人物に関してこのような膨大な史料群が残されていることは希有なことと言ってよいであろう。この日記・書簡という二

つの史料群をお互いに参照することにより彼の思想の展開やこれまで必ずしも明確ではなかった植物学の業績についても解明されるはずである。

例えば、萩原博光は熊楠のキノコの研究について知するためには書簡と日記が重要であるとして次のように述べている。

「じつは、熊楠がキノコ研究をしていたことはよく知られていることだが、その内容についてはほとんどが未知である。（中略）熊楠のキノコ研究は、生前に発表することができなかったキノコ彩色図約三五〇〇点、弟子たちへのおびただしい数量の手紙、終生書き続けた日記な

表2 小畔四郎関係書簡残存数

年代（年）	西暦（年）	書簡（通）	来簡（通）
明治35	1902	0	3
45	1912	0	1
大正3	1914	1	4
4	1915	0	1
5	1916	0	4
6	1917	0	0
7	1918	4	1
8	1919	0	2
9	1920	1	3
10	1921	0	8
11	1922	36	7
12	1923	27	8
13	1924	66	13
14	1925	105	31
15	1926	123	30
昭和2	1927	44	42
3	1928	63	49
4	1929	80	63
5	1930	55	35
6	1931	53	19
7	1932	57	33
8	1933	57	29
9	1934	34	6
10	1935	54	31
11	1936	45	35
12	1937	42	22
13	1938	0	19
14	1939	0	21
15	1940	0	8
16	1941	0	21

出典：『南方熊楠邸資料目録』

どによってうかがい知るしかないといっても過言ではないのである」[萩原 2005: 77]

しかし、現在でも未翻刻の書簡が大量に残されている状況であり、特に粘菌（変形菌）の弟子である小畔四郎宛書簡は翻刻されていないものが多い。表2は、顕彰館に所蔵されている小畔四郎宛の書簡と小畔からの来簡の数をまとめたものである。大正14年（1925）には105通、15年（1926）には123通という大量の書簡が小畔に宛てて書かれている。また小畔からは昭和4年（1929）に63通もの書簡が熊楠に送られている。これは残っているものだけの数字で、実際の発信・受信数はもっと多かった筈である。

この小畔四郎関係の書簡は昭和2年から4年分（『熊楠研究』4-8号に掲載）を除くと全て未翻刻である。これらの未翻刻の書簡類と日記を活字化して全体の様相を明らかにすることは熊楠研究をさらに深化・発展させる上で欠かせない作業である。

4. 来簡の問題

従来の熊楠史料翻刻は当然ながら日記と熊楠の各方面に宛てた書簡を中心に作業が行われて来た。しかし、現在南方熊楠顕彰館に所蔵されている熊楠の書簡は約2,000通、これに対して熊楠宛てに来た書簡、すなわち来簡の方は5,500通余にのぼっている。この大量の来簡は往復書簡集になったもの以外はほとんど日の目を見ていない。

例えば、粘菌研究の弟子の一人である平沼大三郎の来簡は熊楠の書簡が大正15年分しか残っていないため、それに対応する書簡24通のみが翻刻されただけである。他に、平沼来簡は大正10年（1921）から昭和16年（1941）12月までに

わたる623通が眠ったままなのである。言うまでもなく、来簡には熊楠の書簡への返答が書かれているため、失われてしまった熊楠の平沼宛書簡の内容を把握できる格好の史料となる。

次頁の表3は、書簡と同じく主な来簡の残存状況をまとめたものである。表1と比べると、一番の違いは弟の南方常楠の来簡が多数存在することである。その数は200通にものぼる。これにより、空白に近かった熊楠20代の情報を補うことが可能となる。常楠の来簡は中瀬[1993b]によって二通紹介されている。そのうちの明治20年11月2日のアメリカ・ミシガン州滞在の熊楠に宛てた書簡には「九月廿四日附書面拝見仕候。兄脳充血の為病まるる由、嘸かし御困りと奉推察候。尚此上充分御養生祈居候。」⁽¹⁴⁾とあり、アメリカでも熊楠の体調不良が続いているような記事が見られる。これは中瀬も指摘するように日記には記載がなく、この常楠の来簡によってのみ窺われることである。

来簡の意義についてもう一例述べると、中村古峽からの来簡がある。これは安田忠典[2003]によって翻刻・紹介がなされている。中村古峽は当時『変態心理』という雑誌を発行していた編集者であり、また自身も小説を書き、後には精神医学も学ぶという多才な人であった。熊楠はこの『変態心理』という雑誌にも数編寄稿していたのだが、中村から雑誌『太陽』に連載されていた熊楠の十二支の話（後の「十二支考」）をまとめて出版することを依頼されていた。「十二支考」の出版の事情は従来不明確であったが、中村古峽来簡の紹介によって初めて明らかとなった。

それによると版權譲渡の対価として中村は熊楠に1,000円を支払うこと、さらに研究所寄付

表3 南方熊楠の日記と来簡の残存状況表

年代 (年)	西暦 (年)	年齢 (歳)	日記	南方 常楠(弟)	土宜 法龍	古田 幸吉	柳田 国男	小畔 四郎	上松 菊(しげる)	平沼 大三郎	毛利 清雅	宮武 省三	今井 三子	岡田 要之助	三田村 玄龍
明治14	1881	15	○												
15	1882	16													
16	1883	17	○												
17	1884	18	○												
18	1885	19	○												
19	1886	20	○												
20	1887	21	○	○											
21	1888	22	○	○											
22	1889	23	○	○											
23	1890	24	○	○											
24	1891	25	○												
25	1892	26	○												
26	1893	27	○	○	○										
27	1894	28	○		○										
28	1895	29	○	○	○										
29	1896	30	○	○											
30	1897	31	○	○											
31	1898	32	○	○											
32	1899	33	○	○											
33	1900	34	○	○	○										
34	1901	35	○	○	○										
35	1902	36	○	○	○	○		○							
36	1903	37	○	○	○										
37	1904	38	○	○	○										
38	1905	39	○	○											
39	1906	40	○	○											
40	1907	41	○	○											
41	1908	42	○												
42	1909	43	○		○	○									
43	1910	44	○	○	○	○									
44	1911	45	○	○	○	○	○				○				
45	1912	46	○	○	○	○	○	○							
大正2	1913	47	○	○	○	○	○								
3	1914	48	○	○			○	○							
4	1915	49	○	○	○		○	○	○		○				
5	1916	50	○	○	○		○	○			○				
6	1917	51	○	○	○		○		○		○				
7	1918	52	○	○	○			○	○		○				
8	1919	53	○	○				○	○		○				
9	1920	54	○	○	○			○	○						
10	1921	55	○	○	○			○	○	○	○				
11	1922	56	○	○				○	○	○	○				○
12	1923	57	○					○	○	○	○	○			○
13	1924	58	○	○		○		○	○	○	○	○			
14	1925	59	○			○		○	○	○	○	○		○	
15	1926	60	○				○	○	○	○	○	○			○
昭和2	1927	61	○					○	○	○	○	○			○
3	1928	62	○	○				○	○	○	○	○			○
4	1929	63	○			○		○	○	○	○	○	○		
5	1930	64	○					○	○	○	○	○	○	○	○
6	1931	65	○					○	○	○	○	○	○		
7	1932	66	○			○		○	○	○	○	○	○		
8	1933	67	○					○	○	○	○	○	○		○
9	1934	68	○					○	○	○	○	○	○	○	○
10	1935	69	○					○	○	○	○	○			
11	1936	70	○					○	○	○	○	○			
12	1937	71	○					○	○	○	○	○	○		
13	1938	72	○					○	○	○	○	○			
14	1939	73	○					○	○	○		○	○		
15	1940	74	○					○	○	○		○	○		
16	1941	75	○			○		○	○	○		○	○	○	

出典:『南方熊楠資料目録』

金として100円を加えることという条件で交渉は折り合った。熊楠は内金としてまず500円を得た。しかし、その後中村の精神病院経営の破綻と息子熊弥の病気などによって、最後の「牛の話」（「十二支考」は寅から始まっている）を書く余裕が熊楠になくなったことなどで、結局「十二支考」の刊行は実現できなかったのである。その間、岡書院や大岡山書店など他の出版社が中村に版權購入を打診したこともあったが、金額で折り合わなかったようであったことも同来簡から窺える。熊楠の代表作と言われた「十二支考」が生前に出版されなかった事情が中村来簡により明白となったのである。

このように来簡は熊楠の空白期を埋める史料として重要であるばかりではなく、その他の様々な情報を読み取ることができる点においても貴重なものである。

5. 熊楠史料の持つもう一つの意義

明治から昭和戦前期まで残存する南方熊楠の史料群は、熊楠研究のみに役立つわけではない。「手紙魔」である熊楠の人脈は広く、政治家から地元の知己までその交遊範囲は広く多彩である。この点から熊楠の史料は熊楠以外の人物や組織の研究にも役立つことになる。

例えば、熊楠の交流の相手として有名なのが孫文である。熊楠はロンドン時代に孫文と知り合い、交遊を続けることになる。明治30年（1897）の日記にはその当時の両者の交遊に関して次のようにある。

3月16日条「ダグ〔ダグラス〕氏オフィスにて孫文氏と面会す」

3月19日条「午後六時過、館〔大英博物館〕を立
出、孫文氏と共にマリア（ハイドパーク辺の料理

店。予曾て今西、杉田等をつれ行し所）に行き食す。それよりハイドパークにて話し、又バスに乗り、其宅に行、十時迄話し、別れ帰る」

3月20日条「博物館前イースター島像傍のベンチに腰掛、孫文氏と話す」⁽¹⁵⁾（〔 〕内は引用者）

二人はかなり意気投合したようで、その後も何回も孫文と歓談する記事が現れる。明治34年（1901）2月には、孫文が帰国した熊楠を訪ねて直接和歌山へ来て旧交を温めている。

残念ながら熊楠から孫文へ宛てた書簡は残っていない。また、孫文から熊楠へ宛てた書簡は『日記』2巻の付録として収録されているが量的にはそれほど多いものではない。このように二人の交流を直接窺い知る史料はごく僅しか残っていない。しかし武上真理子は熊楠が授受した他の書簡の中での孫文の言及に注目し、「これらは、当時の熊楠から孫文に向けられた関心を伝える資料として貴重なものである」と評価する〔武上 2006: 46〕。

平成18年（2006）12月9日には「孫文と南方熊楠学術シンポジウム」が開催されるなど、近年、孫文研究者から南方熊楠の史料は注目されはじめている。

また、武内善信〔1997〕は、熊楠へ宛てた新日本新聞社からの手紙を重視している。『新日本』新聞とは、在米の自由民権家が創刊した反政府新聞である。武内によると、この新聞は発禁処分を受けるなど、時の政府に大きな衝撃を与えたものであるという。この新聞の一次史料は東京大学明治新聞雑誌文庫に第8号がコピーで所蔵されているだけで他には存在しない。したがってこの新聞社から熊楠に宛てた手紙は一次史料として貴重な存在だと述べる。武内はこの史料の発見などから「南方熊楠の蔵は玉手箱

だ」(「蔵」とは当時熊楠の諸史料が保存されていた南方熊楠邸宅内にあった蔵のことを指す)と表現するほど熊楠史料群のいろいろな可能性を予想している。

この他、土宜法龍、柳田国男、折口信夫(国文学者・民俗学者)、三田村玄竜(鳶魚、随筆家・考証家)、河東碧梧桐(俳人・書家)、宮武外骨(ジャーナリスト)などと交流があり、これらの人物研究についても熊楠史料は見逃せないものと言える。

もう一つ熊楠史料の利用に関して注目すべきものに小峯和明の一連の研究がある[小峯 1997, 1999-2006]。熊楠は読んだ本に夥しいほどの注記をするのが通例である。この研究は熊楠の『今昔物語集』への書き込みとそれに関する熊楠書簡を対象として、それを現在の今昔物語研究に生かそうという試みである。例えば、熊楠は『今昔物語集』などの写本は名家に秘蔵され、近世になってようやくひろまったことを指摘している。これについて小峯は、『今昔物語集』が中世に埋もれていたことを熊楠が言い当てていたものであると述べる。

小峯はこのような熊楠の洞察を紹介しながら熊楠の今昔研究を媒体にして、「あらたな説話を模索したい」とその研究の目的を述べている[小峯 1997: 38]。

この小峯の研究は、熊楠史料への新しいアプローチの一つといえるであろう。

ところで、丹羽邦男[1976]は日本近代史の史料は、量的にも質的にも制約された私的史料と歴大な官庁史料とから成り立っていると指摘する。さらに近代で最も私的なものである日記史料であってもそれは戸長・区長・村長等の公職の立場から記述されているものが多いと述

べる。そして、「公的史料の優越こそ、我国近代の史料の特色にほかならない」[丹羽 1976: 172]と日本近代史における史料の特徴を端的にまとめている。

公的史料の優越性が日本近代史の特徴とするのなら、熊楠の史料群は逆に一民間人の私的史料として近代史における希少価値をもつ可能性がある。

例えば熊楠は大逆事件と若干関わりのあることが日記から分かる。明治44年(1911)1月24日条には「本日午前九時より午後に涉り幸徳伝次郎以下十二名死刑執行、成石平四郎もあり」⁽¹⁶⁾とある。熊楠はこの事件で処刑された成石平四郎とは面識があったからか、わざわざ友人川島友吉に宛てた成石の葉書を借りて筆写している。それには以下のようにある。

暫ク交誼を忝シ千万感謝小生事十八日死刑ノ宣告ニ接シ申候就テハ遠カラズ此肉骸ハ斷頭台上の露ト消エ可申候今更何事をも語り不申候然し小生は死を以テ暗黒と感せず光明ある浄土ニ至る事と堅く信じ歎喜ノ中に冥黙す可く候先ハ此世の御暇まで⁽¹⁷⁾

さらに1月30日条には「午下成石平四郎刑死前一月下旬の日付、一月二十八日牛込の消印ある葉書届く」⁽¹⁸⁾とあり、直接熊楠に宛てた成石の葉書も受取っている。この葉書も日記に写し取っている。

先生是迄眷顧を忝しましたが、僕はとうとう玉なしにしまいました。いよいよ不日絞首台の露と消え申すなり。今更何をかなさんや。唯此上は、せめて死にぶりなりとも、男らしく立派にやりたいとおもっています。監獄でも新年はありましたから、僕も三十才になつたので、随分長生を

したは何事もせずに消えます。どうせ此んな男は百まで生たつて小便たれの位が関の山ですよ。娑婆におつたて往生は昼の上ときまらん。そう思ふと、御念入の往生もありがたいです。右は一寸此世の御暇まで。

東京監獄にて成石平四郎四十四年一月下旬⁽¹⁹⁾
(繰り返し記号は、ひらがなになおした)

成石の書簡が熊楠の史料から発見され、裁かれる側の成石の最後の感慨を窺うことができるのである。熊楠はこの事件に対して日記では何も論評していないが、葉書の筆写という行為を見ると、この事件に深い関心を持っていたことが窺われる。

杉中浩一郎[1991]によると、成石が家宅搜索を受けたときに幸徳秋水や大石誠之助からの書簡とともに成石に送った熊楠の書簡も押収されたという。ただし、成石の大逆事件の証拠調べに熊楠はかかわることはなかったという。

さらに、熊楠の史料は当時の田辺市の様子を伝える史料としても重要である。例えば、『田辺市史』第三卷通史篇Ⅲでは、当時の田辺町の公立図書館の状況を熊楠の柳田国男に宛てた書簡を引用して紹介している。

当時の田辺町にあった西牟婁郡立図書館は、大正4年(1915)4月1日に郡会議事堂を書庫および閲覧室として利用し、開設されたものである。しかし、その後の利用状況は思わしくなかったという。この間の図書館の状況はそれを利用して熊楠の書簡により窺われる。その書簡には次のようにある。

「当地図書館に『大正一統志』あるゆえ、(略)故に就いて通覧にかけ候ところ、不幸にも右図書館の閲覧室をもって当分裁縫教授所に充てられ、女教師数名と数十名の女生徒(多くは村部の人々)来たり稽古する、(以下略)」⁽²⁰⁾

図書館開設の翌大正5年(1916)4月に田辺実業学校が開設されている。この熊楠の書簡はその学校の伎芸科生徒のために図書館の閲覧室が臨時の実習室として利用されていたことを物語っているのである。『田辺市史』では、図書館の利用者が少ない背景には、このような当時の図書館の事情があったと熊楠の書簡を利用して指摘するのである。

また熊楠の日記や書簡を読んでいると、「舍利塩」という下剤や「フマキラ」という殺虫剤の商品名がでてくる。さらに「ケンケラソ」というお菓子の名前などに会う(熊楠はこれを「^{えんどう}碗豆を炒てアメで丸くとちたるもの也」と説明している)。今でもおなじみのものや、もう使われなくなったものなどがあるが、このように当時、日常的に使われたものを知ることでもある。ここに挙げた事例自体は大して重要な情報ではないが、一民間人の日常的な生活の様子が窺える史料の一つであることは分かるだろう。

このように熊楠の日記・書簡には様々な事件・事故から日常的な生活に至るまで細々とした記事が存在する。つまり、熊楠の遺した史料により政治家ではない一民間人の目から見た当時の世相や事件などを知ることができるのである。熊楠の諸史料は日本近代史上において民間人の観点からの情報を得られるという意味で貴重な存在といえる。

おわりに

以上述べてきた所論をここで整理してみたい。まず、南方熊楠の遺した史料は膨大であり、それには日記と書簡という二つの重要な史料群が存在する。

日記は熊楠10代から亡くなる75歳まで一貫し

に残っている。したがって熊楠の生涯にわたる事項索引として日記を位置づけることが可能である。ただし記述自体は簡潔であるため、その内容を補うものとして細かく丁寧に書かれている長文の書簡の存在が重要となる。つまり日記を索引として使い、詳しい内容は、発信された書簡を読むことによって理解できるのである。ところが、書簡の欠点として全てではないにしろ、その記述には若干の誇張・捏造などが入りこむことがある。その欠点を補うために今度は逆に日記の記述を参照することにより、その誇張部分を訂正してある程度の正確な事実を把握することが可能となる。したがって日記と書簡の相補性に注目する必要がある。つまり、日記と書簡を有機的に結びつけることによって南方熊楠の総合的研究を深化させることが可能となるのである。

次に日記と書簡の残存状況を見ると、40代後半以降は小畔四郎・上松翁などの植物学の高弟と地元のジャーナリスト・政治家である毛利清雅の書簡が豊富に遺されている。これにより全ての翻刻が成されたら熊楠の後半生の研究は大いに進展することとなる。しかし、日記と書簡だけでは、20代から30代前半のことは良く分からない。この欠点を補うものとして来簡は重要である。例えば、弟の常楠の来簡は、熊楠の20代から30代にかけても遺されているため、この来簡の解読もまた必要となろう。さらに、熊楠の遺した「珍事評論」などの史料も20代の熊楠を知るのには不可欠である。

また、熊楠の史料は熊楠の総合的研究を進めることだけに重要なのではない。孫文や柳田国男など熊楠の人脈はかなり広範囲にわたっており、その相手の人物研究においてもこの史料群

は価値があるといえる。

熊楠は日本近代史の政治上における重要な役割を果たした人物ではなく、さらに大学や研究機関に奉職した人間でもない。終生一民間学者として研究を続けた人である。そのため政治史に関する情報はこの史料群から詳しく読み取ることはいかなる。しかし、逆に政治家や官庁の史料が中心（偏重）である日本近代史において、当時の人々の日常生活やいろいろな世相・事件などを記録している熊楠の日記・書簡は一民間人の史料として、日本近代史への新たな視点を提供するものとしても貴重なものと言えるであろう。

〔投稿受理日2008.5.24／掲載決定日2008.6.16〕

注

- (1) 中瀬喜陽. 1992. p. 218.
- (2) 『日記』3巻. p. 171.
- (3) 「日記」大正15年9月14日条 南方熊楠顕彰館所蔵 未刊
- (4) 平沼大三元宛南方熊楠書簡 大正15年9月14日付書簡『南方熊楠平沼大三元往復書簡』p. 188.
- (5) 熊楠の書簡については雲藤 等. 2005を参照.
- (6) 『全集』7巻. p. 31-32.
- (7) 『日記』2巻. p. 217.
- (8) 『日記』同上.
- (9) 『日記』2巻. p. 275.
- (10) 『日記』2巻. p. 431.
- (11) 『日記』2巻. p. 413.
- (12) 『南方熊楠. 独白』p. 235.
- (13) この暗記して筆写のエピソードに関しては雲藤 等. 2002. を参照.
- (14) 中瀬喜陽. 1993b. p. 267.
- (15) 3月16日条から20日条はいずれも『日記』2巻. p. 11.
- (16) 『日記』4巻. p. 12.
- (17) 同上.
- (18) 『日記』4巻. p. 14.
- (19) 同上.
- (20) 『全集』8巻. p. 478.

参考文献

- 飯倉照平編. 1985. 『南方熊楠選集別巻 柳田国男 南方熊楠 往復書簡』平凡社, 8+468pp.
- 飯倉照平・長谷川興蔵編. 1990. 『南方熊楠・土宜法竜往復書簡』八坂書房, v+445pp.
- 雲藤 等. 2002. 「南方熊楠の記憶力をめぐる問題」『熊楠研究』4号, p. 52-74.
- 雲藤 等. 2005. 「南方熊楠の手紙」『國文學』50巻8号, p. 99-105.
- 笠井 清編. 1988. 『南方熊楠書簡抄-宮武省三宛-』吉川弘文館. 242pp.
- 小峯和明. 1997. 「南方熊楠の今昔物語集-説話学の階梯-明治編」『文学』第8巻・第1号. 岩波書店. p. 37-49.
- 小峯和明. 1999-2006. 「南方熊楠の今昔物語集」『熊楠研究』1-8号.
- 近藤俊文. 2005. 『天才の誕生』岩波書店. 238pp.
- 斎木一馬. 1978. 「古文書と古記録」『日本古文書学講座』1総論編, 雄山閣出版. p. 21-35.
- 佐々木 隆. 1977. 「日記」中村隆英・伊藤 隆編『近代日本研究入門』東京大学出版会. p. 287-302.
- 杉中浩一郎. 1991. 「南方熊楠と大逆事件」飯倉照平・長谷川興蔵編『南方熊楠百話』八坂書房. p. 100-109. 初出は紀南文化財研究会. 1990. 『くちくまの』83号.
- 武上真理子. 2006. 「孫文と南方熊楠-文明の衝突と越境, そして対話-」『熊楠研究』8号. p. 36-59.
- 田辺市史編さん委員会. 2003. 『田辺市史』第三巻通史編Ⅲ. 田辺市. 10+xvii+922+30pp.
- 田辺市南方熊楠邸保存顕彰会. 2005. 『南方熊楠邸資料目録』. 田辺市南方熊楠邸保存顕彰会. 526pp.
- 谷川健一・中瀬喜陽・吉川寿洋編. 1981年. 『父南方熊楠を語る』日本エディタースクール出版部. iv+282pp.
- 中瀬喜陽編. 1988. 『南方熊楠書簡 盟友毛利清雅へ』日本エディタースクール出版部. xii+277pp.
- 中瀬喜陽編. 1990. 『門弟への手紙 上松翁へ』日本エディタースクール出版部. xiv+375pp.
- 中瀬喜陽編. 1992. 『南方熊楠, 独白』河出書房新社. 250pp.
- 中瀬喜陽. 1993a. 「南方熊楠について-未公刊資料 南方熊楠日記 一八九六(明治二九)年-」紀南文化財研究会『くちくまの』第95号. p. 47-56.
- 中瀬喜陽編. 1993b. 『覚書 南方熊楠』八坂書房. 275pp.
- 中瀬喜陽. 1995. 「南方熊楠ノート7 大正期の日記から」『フォークロア』第7号. p. 138-142.
- 中瀬喜陽. 1997. 「南方熊楠 昭和の日記」季刊『文学』第8巻・第1号. p. 73-83.
- 丹羽邦男. 1976. 「近代史料論」『岩波講座日本歴史』25別巻2. p. 171-213.
- 萩原博光. 2005. 「南方熊楠とキノコ」. 松居竜五・岩崎仁編2005. 『南方熊楠の森』方丈堂出版. p. 74-79.
- 長谷川興蔵. 1993. 「主要著作案内 履歴書」. 『新文芸読本 南方熊楠』河出書房新社. p. 217.
- 長谷川興蔵・月川和雄編. 1991. 『南方熊楠男色談義-岩田準一往復書簡』八坂書房. 4+v+439pp.
- 長谷川興蔵・小笠原謙三編. 1993年. 『南方熊楠 竹馬の友へ 小笠原誉至夫妻書簡』八坂書房. 12+142pp.
- 南方熊楠. 1951-1952. 『南方熊楠全集』1巻-12巻. 乾元社.
- 南方熊楠. 1971-1975. 『南方熊楠全集』1巻-10巻, 別巻1・2巻. 平凡社.
- 南方熊楠. 1987-1989. 『南方熊楠日記』1巻-4巻. 八坂書房.
- 南方熊楠顕彰館編. 2007. 『南方熊楠・平沼大三郎往復書簡』. 351pp.
- 南方文枝. 1981. 「思い出すことども」. 谷川健一・中瀬喜陽・吉川寿洋編. 1981. 『父南方熊楠を語る』日本エディタースクール出版部. p. 55-70.
- 南方文枝. 1990. 「父・熊楠の素顔」『新潮』87巻8号. p. 164-173.
- 南方熊楠資料研究会編『熊楠研究』1999-2006 1号-8号, (8号のみ『熊楠研究』編集委員会編).
- 安田忠典. 2003. 「中村古峽と熊楠」『熊楠研究』5号. p. 165-183.

謝 辞

南方熊楠顕彰館には, 未刊の「日記」の史料掲載を御許可いただき, 感謝いたします。